参考資料

1　坂口安吾の精神

秋山　駿　磯田光一

従来戦時下における抵抗の書、ある種の反戦文学としてとらえられていた「日本文化私観」を、金属供出令と関連させ「大東亜戦争」肯定論ととらえ、「文化右翼を断罪しながら自国の現実と共に寝て運命を共にする思想」であるとした磯田の発言が、大きな衝撃を与えた対談。

「日本文化私観」をどうとらえるか

秋山　安吾は戦争については、小林秀雄のごとき言葉ね、〝黙って事変に処す〟とか、ああいうことを言ってましたかね。

磯田　言ってないんです。これは小林秀雄と安吾とを比較する場合は、いろんな問題になって出てくると思うのですが、『日本文化私観』をどう受けとめるかということと、かなりからんでくると思うのですよ。

あれは出たのが昭和一七年三月で、大東亜戦争が始まって数カ月後です。日本文学報国会ができ、大東亜文学者会議が始まる時代ですね。そういう時代に、京都や奈良の仏像がぶっつぶれてもかまわない、というわけですね。

秋山　金属の供出もあったときですね。

磯田　あれを単純に反戦と言いきっていいかどうかということですよ。つまり、単純に日本主義への抵抗というふうなレベルの問題なのか、もっと深いのではないかという気がするんですけど、秋山さんはどう思いますか。

（中略）

秋山　あの復讐心はどうしたんだろうな。

磯田　その根っこを辿っていきますと、いまあなたに〝金属供出〟ということを言われて、ぼくはそのとおりだと思うんですよ。つまり『日本文化私観』が一七年で、なぜあれだけ凄じい文章が検閲にひっかからなかったかということね。ゆうべ昭和一七年の綜合雑誌の目次を調べたんですが、かなり戦争賛美がファナチックになっています。しかし、よく考えてみると、京都の寺をぶっこわして鉄橋をつくるというのは〝大東亜戦争〟の論理なんだ。極端に言えば「日本文化私観」は〝大東亜戦争〟肯定論としても読めるんです。そこのところをいままでだれも言ってない。あの戦争はただファナチックじゃなくて、堂々たる近代的戦争です。ゆうべ、つくづくそれを考えたんですよ。洋服を着ながら下駄ばきで歩くことを安吾は不自然でないというふうに見るわけですね、これは日本の現実なんだから。その論理は、小林秀雄ふうにいうと、音楽はレコードで聴き、絵は複製で見るのがわれわれの文化の現実である、という見方ですね。そうしますとね、いまの流行思想みたいに、近代を一方的に断罪としてしまえば、観念のレベルで〝近代の超克〟に気軽にいけるんですよ。しかし小林さんはそういうことをしてない。安吾自身もファナチックにならないところに大きさをぼくは感じますね。

「日本文化私観」があの時点で発表できたのは、家庭の中にある金属を供出して鉄砲をつくるという論理と、京都の寺がぶっこわれてもかまわないという論理が、まさに同じものだったからです。具体的にいうと、あのエッセイの翌々月、五月九日に〝金属回収令〟が出て寺の鐘が強制的に奪われているんです。あれを一方的に反戦と見た安吾観のほうがおかしいと思う。あの時点で、鉄橋をこわして寺をつくれと書いたら、まちがいなしに発禁になったでしょうね。今じゃ、その辺が通じにくくなっている。あの安吾の評論は非常に屈折した現実肯定ですよ。つまり文化右翼を断罪しながら、自国の現実と共に寝て運命を共にするという思想なんです。

秋山　安吾の非常に屈折した現実肯定というのが一貫していますね。

（「ユリイカ」一九七五年一二月号）